



Title	＜紹介＞矢田勉著『国語文字・表記史の研究』
Author(s)	深澤, 愛
Citation	語文. 2013, 100-101, p. 148-149
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70917
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

矢田勉著『国語文字・表記史の研究』

深澤 愛

矢田勉氏の『国語文字・表記史の研究』は、極めて高い水準で文字・表記史について研究してきた氏の論考をまとめたもので、学界待望の書である。

本書は本編だけでも七八三頁に及ぶ大著で、第一編「文字・表記史研究の目的・方法・資料」第二編「文字・表記史の原理」第三編「平仮名史・平仮名文表記史の研究」第四編「漢字文表記史の研究」第五編「印刷と文字・表記史」第六編「文字意識史と文字研究史」の六編、計三十四章から成る。紙幅の都合もあり、また佐藤栄作氏が『日本語の研究』第九卷三号に編ごとの論評を行なっていることも鑑みて、本稿では本書を一冊の研究書として通読した時に見えてくる事柄についてささやかな紹介を試みたい。

矢田氏が明確な問題意識を持ち、それに応ずるために資料を博搜した上で立論する優れた研究者であることは、氏の論文を一編でも読んだことのある者ならば誰しも直ちに気付くところである。そうした論文をまとめて修正・加筆を施し、五章分の書き下ろしを加えたのが本書であるが、改めて通読して実感するのは、これだけ大部の著作でありながら、単なる「論文集」に陥ることなく、各章を、あるいは各編を跨いだ論の有機的な連関が色濃く表れていることである。

その一例として、いろは歌に関する論に注目したい。いろは歌について主に論じている章は、第三編と第六編にある。

第三編第二章では、平安・鎌倉時代の平仮名字体の変遷を三つの時期に分けて記述し、平安末～鎌倉初期の頻用字体体系からいろは歌書写の平仮名体系（それはさらに現行の平仮名体系につながっていく）が生じていることを指摘する。そして、第四章において、平仮名書きいろは歌の姿が中世後期以降殆ど変化していないことに着目し、その固定化に大きく寄与したのは、平安貴族から仮名教育を継承し発展させた中世の中・下層識字層ではないかと論じる。さらに、平仮名書きいろは歌の字体選択の基準は、単独で（すなわち連綿させずに）書かれて安定すべき形状の字であると述べる。続く第五章では、中世後期から江戸期における青蓮院流のいろは手本において、上述したような仮名字体に成るものと共に別体のいろは歌を添えるのが定型であるという事実を踏まえ、「平仮名らしさ」の基準の変化を漢字書体史との相関から導き出す。さらに第九章において、遡って院政期の『夜鶴庭訓抄』に見える「イロハカキ」という語は、いろは歌（以呂波歌）のような、連綿のない配字法を指すという解釈を示している。

一方、第六編第五章において明らかにされるのは、以下にまとめるような、いろは歌を巡る思想的展開である。いろは歌＝平仮名の作者を空海とする、よく知られた説はいきなり出来たのではない。一三世紀後半からのいろは歌研究書でいろは歌の作者を空海に擬するところから始まり、そこから平仮名自体も空海の作

とする論の飛躍や仮名字母研究への関心の芽生えなど、時代とともに様々に展開していった末に、近世いろは歌研究において、国語研究者達が文字コンプレックスから解放する手段としての役割を担うようになった。さらに、第六章において述べられるのは、『倭片字反切義解』の扱いをめぐる諸問題を踏まえ、同書を偽作と考えた場合に、いろは歌研究史・五十音図史・仮名研究史の流れをより矛盾なく描けるようになるという主張である。

これらの考究に、稿者は、全編に亘って繰り返し強調される文字・表記史の複線性や、第一編第四章で説かれる書記教育史への目配り、さらに、第五編で論じられる印刷と文字・表記史の関係——「印刷時代の書記史の原理は読み手の立場の側にある」という論理を踏まえた、文字を書ける・読める人間の増加に伴う種々の文字・符号類の変遷に関する論述を重ね合わせつつ読んだ。

平仮名史を、他の文字体系や印刷・教育など文字を取り巻く環境との相関においても描く。文字の歴史を現象の変遷として捉えるのみならず、背後に横たわる思想まで考察の射程に入れる——本書を読む者の前に立ち上るいろは歌や平仮名の歴史は、あたかも地中に深く広く根を張り、縦横に枝葉を伸ばす巨木のようなものである。

惜越ながら本書への「もの足りなさ」を述べるとするならば、第六編で述べられた文字意識史が、主に近世漢学者・国学者を中心にしたものであり、言葉に対して一般以上に自覚的であった人間の意識が中心に論じられている点である。

書状や手習いの類も積極的に扱って俯瞰的に文字・表記史を記

述した本書を読んだ後では、歴史に名を残さなかった人々の文字・表記に対する意識がどうだったのか知りたくなるところである。尤も、第六編第一章でそうした点の扱いについても触れられているのだが、文字に対する意識の歴史を総体として捉える場合（あるいは総体としては捉えられない可能性も含めて）、氏がどのように歴史を描くのか強く興味をひかれるところである。

最後に特筆しておきたいのは、本書の記述姿勢である。氏は、研究者の過剰な分析によつて文献の書き手の意識しなかったことまで規則として「発見」することを強く戒めている。本書では、ある時代の文字・表記の有様を記述するために文献を虚心坦懐に読み込み、研究者が寧ろ当時の人間に歩み寄っていくような謙虚な記述姿勢が貫かれている。本書を通読していると、どれだけ理論が発達しようとも、文献をもとに論ずる以上、その文献が成立した時代の人間を無視してはならないという、文献国語学の基本を思い出させてくれるのである。

本書は、文字・表記史研究を手掛ける者の必携の書であることは勿論だが、文献国語史研究を志す全ての者が参照すべき書であるといっても過言ではないだろう。

（汲古書院、二〇二二年二月、八二五頁、一九、〇〇〇円）

（ふかざわ・あい 近畿大学准教授）